

北武蔵の埴輪生産と地域社会

城倉 正祥

はじめに

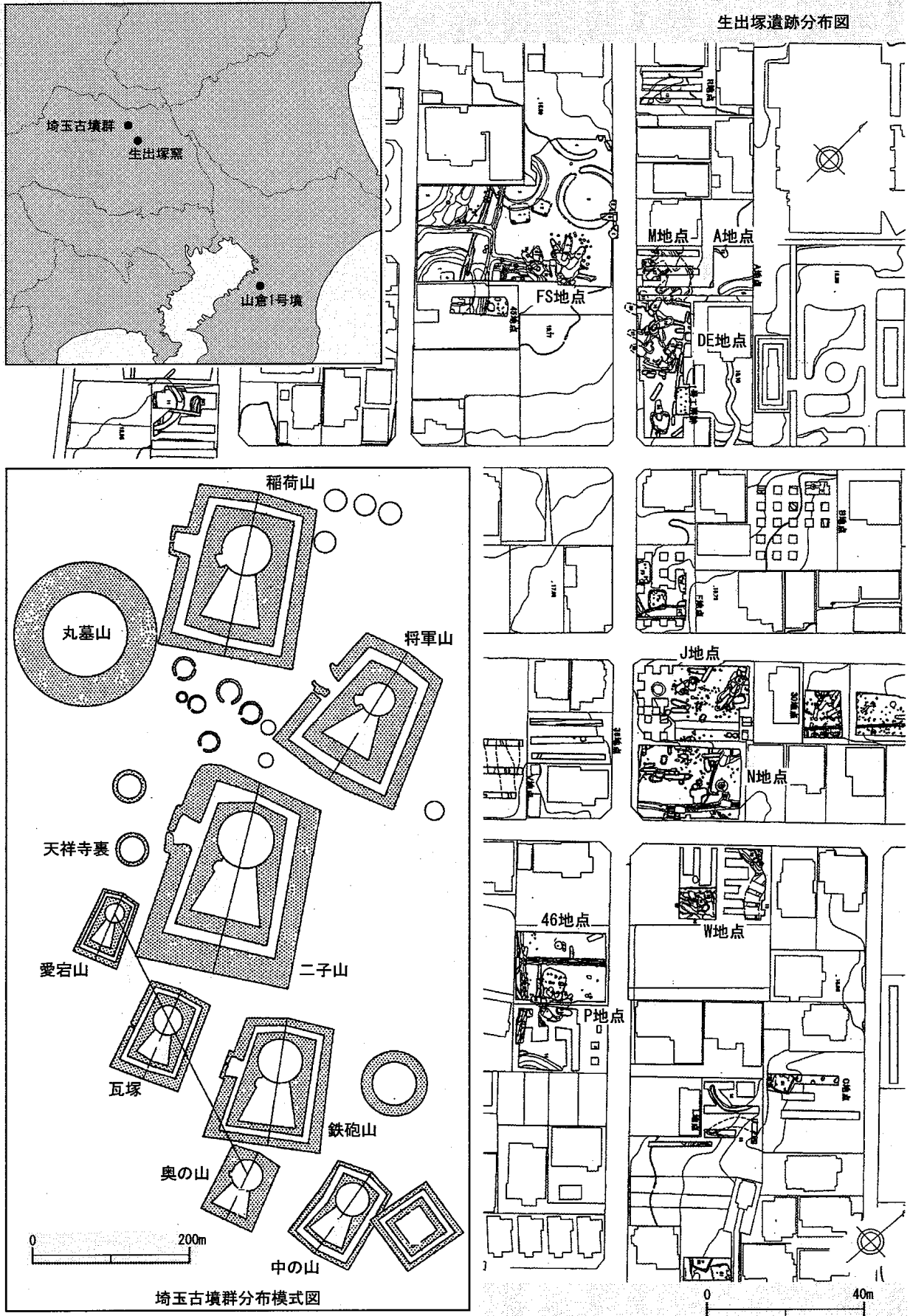
遺物を分析対象とする考古学において、「社会」を復元することは容易ではない。特に、現在の考古学研究は、個々の遺物の詳細な分析に基づく議論に立脚しており、実証的な分析の蓄積を踏まえた上での「社会」復元が求められている。古墳時代研究では、古墳・集落・首長居館・埴輪・土器等の詳細な分析を踏まえた上で、上毛野という一地域の「政治構造」を多角的に捉え直した若狭徹の一連の研究が注目される（若狭二〇〇二・二〇〇四・二〇〇六）。「地域社会」という文脈の中で、詳細で多角的な分析を行う若狭の研究は今後のスタンダードになると考える。それにはまず、一地域という枠組みの中での詳細な遺物研究が蓄積

される必要がある。本稿は、以上を踏まえた上で、北武蔵地域に焦点をあて、特に埴輪の分析から「地域社会」のあり方の一端を考究する。

具体的には、当該地域の「首長墓群」である埼玉古墳群と、その主要な生産遺跡である生出塚窯の埴輪の分析を通して、当該地域の埴輪生産の具体像を明らかにし、その成果を「地域社会」という文脈の中で再評価する。同工品識別に基づく詳細な埴輪の分析から、「地域社会」を考究する、それが本稿の目的である。

1. 分析対象と分析視角

埼玉古墳群は、5世紀末〜6世紀後半にかけて連綿と大型古墳が築造された「武蔵国造」の奥津城と考えられてお



第1図 埼玉古墳群・生出塚遺跡

り(第1図)、墳丘規格・古墳立地・副葬品・埴輪などの詳細な研究が蓄積されている(塩野二〇〇四)。埴輪も各古墳を単位とした詳細な分析が報告されているが、通時的な研究は突帯の扁平率に注目した岡本健一や、樹立の時間差を考えた若松良一の研究など限られている(岡本一九九七・若松二〇〇七)。岡本・若松の研究は、明確な問題意識に基づいた分析で意義深いものであるが、「系統」識別に成功していない点において限界がある。なぜなら、埼玉古墳群の大型古墳には、複数の生産地からの供給が推定されており、「系統」の識別作業なしには、編年などの型式学的検討には限界があるからである。まずは、刷毛目の分析から生産地を特定した上で、生産地ごとに詳細な分析を行う必要がある。

以上の問題点を踏まえ、前稿では埼玉古墳群の主要な埴輪生産遺跡である生出塚埴輪窯における刷毛目のデータベースを構築し、瓦塚古墳・天祥寺裏古墳・鉄砲山古墳・奥の山古墳、愛宕山古墳・将軍山古墳への埴輪の供給を実証した(城倉二〇〇七b)。本稿ではその成果に立脚し、生産地出土品と消費地出土品を結びつけて、生出塚窯産という一つの系統の変遷を明らかにする^①。

2. 生出塚埴輪窯における遺物相の検討

生出塚埴輪窯は、関東屈指の大規模生産遺跡であり、最も様相が明らかとなつている埴輪窯としても知られる。遺跡は、北支台支群と南支台支群に分かれて分布し、6世紀前半～末の四〇基以上の窯が検出されている(第1図)。現状では、南支台支群のJ地点・W地点で、型式的に最も古い埴輪を焼成した窯を検出しているが、離れた地点で同一工具によって調整された埴輪が出土することから、基本的には各地点において同時並行で窯が操業されていた可能性が高い。

前稿においては、北支台支群のF・S地点・A地点・M地点・D・E地点、南支台支群のJ地点・N地点・W地点出土の大型円筒埴輪の刷毛目集成を示した(城倉二〇〇七b)。その中で、各地点に認められる主要な刷毛目は限られている点、同一の刷毛目が確認できる埴輪の多くは同工品である可能性が高い点を指摘した。さらに、同一刷毛目が認められる各類型は、各時代の埼玉古墳群の首長墓に供給されたものと推定し、実際に埼玉古墳群出土埴輪と刷毛目が一致する事実を示した。ここでは、埼玉古墳群の埴輪と同一の刷毛目が認められる埴輪の形態・技術を比較検討すると

ともに、出土状況を踏まえた検討を行う。

第2図には、埼玉古墳群の埴輪と同一の刷毛目が確認された埴輪の形態比較図を示した。便宜的に、生出塚遺跡における刷毛目番号をそのまま各類型の名称としている（生出塚刷毛目データベース参照―城倉二〇〇七b）。なお、ここで言う「類型」とは「同一の刷毛目が認められる一群」であり、同一類型≡同工品ではない。以下、各類型の特徴を詳述する。

DE8類型（第2図①）

DE8類の刷毛目は、生出塚遺跡ではDE地点・J地点・N地点で認められる。さらに、埼玉古墳群の瓦塚古墳、新屋敷古墳群C区埴輪棺、新屋敷25号墳出土品に認められ、円筒はいずれも大型品である。形態は、以下の3類に分類できる。A類は、段間が均等に割り付けられる3条4段（N地点出土品）、B類は、段間が均等に割り付けられる4条5段（瓦塚・新屋敷C区出土品）、C類は、低位置に第1段が設定される5条6段である（DE地点・新屋敷25号出土品）。しかし、突出度が高く2稜を明瞭に作出する突起、ピッチの細かい内外面のハケ調整、若干歪む透孔など他の特徴はいずれも一致している。同一工人、あるいは技術的に近い工人が製作した可能性が高い。A・B・C類の各形態は何らかの目的で作り分けられていたと推察されよ

う。

W1類型・W4類型（第2図①）

生出塚遺跡W地点の32号・33号窯出土品は、山崎武によって埼玉古墳群の天祥寺裏古墳との共通性が指摘されていたが（山崎二〇〇六）、確認できる4種類の刷毛目はいずれも天祥寺裏古墳出土品と一致していた（城倉二〇〇七b）。山崎の指摘どおり、32号・33号窯は天祥寺裏古墳へ供給する埴輪の主體的生産窯だったと考えられる。供給先である天祥寺裏古墳の墳形・規模は定かではないが、40mほどの円墳の可能性が高いとされる（斉藤他一九九四）。ところで、生出塚遺跡から遠距離供給された山倉1号墳の埴輪は、生出塚P・46地点の31号窯の一基で焼成されたと指摘されている（小橋二〇〇五）が、その内容は多く見積もって円筒250個体、形象56個体にもなる。このデータからすれば、二基の窯であれば、天祥寺裏古墳への埴輪の供給は十分に果たせたと思われる。

第2図①では、比較的大きく復元できているW1類型、W4類型を図示した。W1類型はいずれも4条5段で緩やかに立ち上がり、口縁部を大きく外反させるプロポーションが一致する事がわかる。上稜の強い突起、内外面調整の共通性などから同工品と考えられる。一方、W4類は天祥寺裏古墳の27・32の個体のように第1段が低い4条5段の

円筒に加えて、W地点42・43のように小型の2条3段、3条4段の円筒も確認できる。しかし、両者の突帯形状や内面の密なヨコハケなどは酷似しており、同工品、あるいは近い工人が製作したと考えられる。4条5段の製品に関しては、天祥寺裏古墳に供給されたのは確かだが、小型の円筒埴輪は同時期のより規模の小さい古墳へ供給された製品と考えるのが妥当であろう。以上のように、W地点32・33号窯は、複数の「プロジェクト」で使用されたと考えられる。

DE16類型・DE5類型(第2図②)

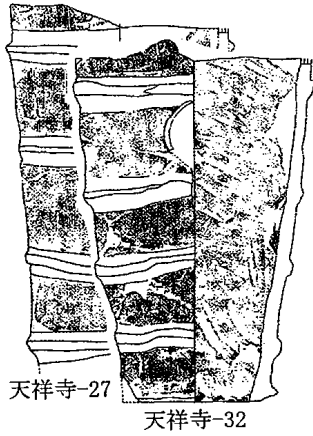
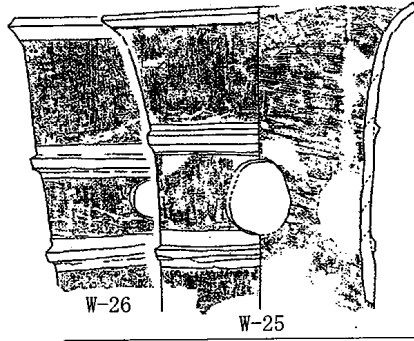
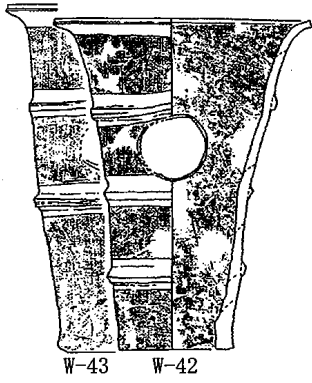
DE16類の刷毛目は、鉄砲山古墳出土品でも確認できた。第2図②の上にあるように、DE地点の1802、1804の個体は、プロポーションが全く同一で、さらに受け口状の口縁部、扁平でナデ幅の広い突帯、ピッチの細かいナメハケ+ヨコハケの内面調整が一致するなど明らかに同工品である。一方、鉄砲山古墳出土品は、法量も大きく、突帯形状、内面調整などに違いがある。しかし、基本的には寸胴なプロポーションで扁平な突帯などDE地点出土品とよく似ている。5条6段と大型品であることから考えても、DE地点の1802、1804の個体は鉄砲山古墳に供給するために作られた製品の可能性が高い。

ところで、DE16類型と非常によく似た特徴をもつ一群

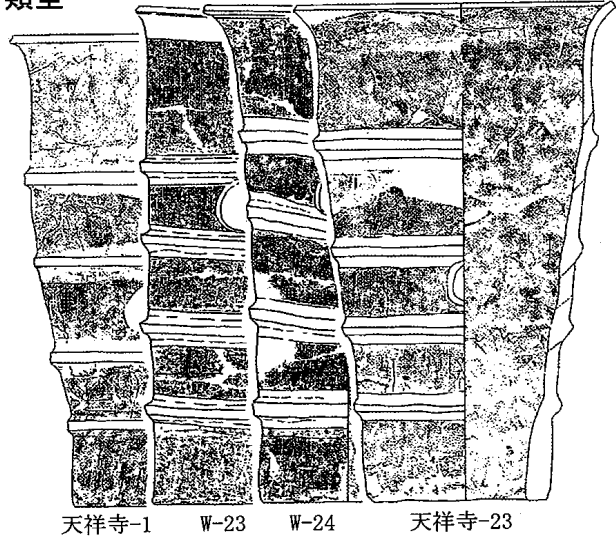
が第2図②下のDE5類型である。DE5類の刷毛目は、今のところ埼玉古墳群では確認していないが、DE地点では多く出土している。また、DE地点に隣接するA地点、M地点、FS地点、さらに南支台支群のN地点でも確認できる。なお、DE5類型は2類に分類できる。A類は径の大きい大型多条品で、B類は第一突帯が器高の半分を設定される2条3段の円筒である。以下、両類の特徴をみてもみる。

A類は径が大きく、底部がハの字状に開き、口縁部は受け口状を呈するプロポーションを特徴とする。さらに、突帯は低平でナデ幅が広い点など全体的にDE16類型によく似ている。6条7段以上になる大型のA類は、当該時期では埼玉古墳群が最も有力な供給先であるが、DE16類に技術・形態的特徴が酷似することから考えて、埼玉古墳群に供給されていたとすれば、鉄砲山古墳を主要な供給先として製作された可能性²⁾がある。その際に重要なのが、DE5類の刷毛目が、A地点15号窯より出土した双脚の正装男子3体と一致する事実である。つまり、破損のため灰原に放置された正装男子3体を含む大型の一群は、鉄砲山古墳、あるいは同時期の大型古墳への供給を目的として製作された埴輪と考えられる。この正装男子については、古くから山倉1号墳出土人物との共通性が指摘されており、重要な

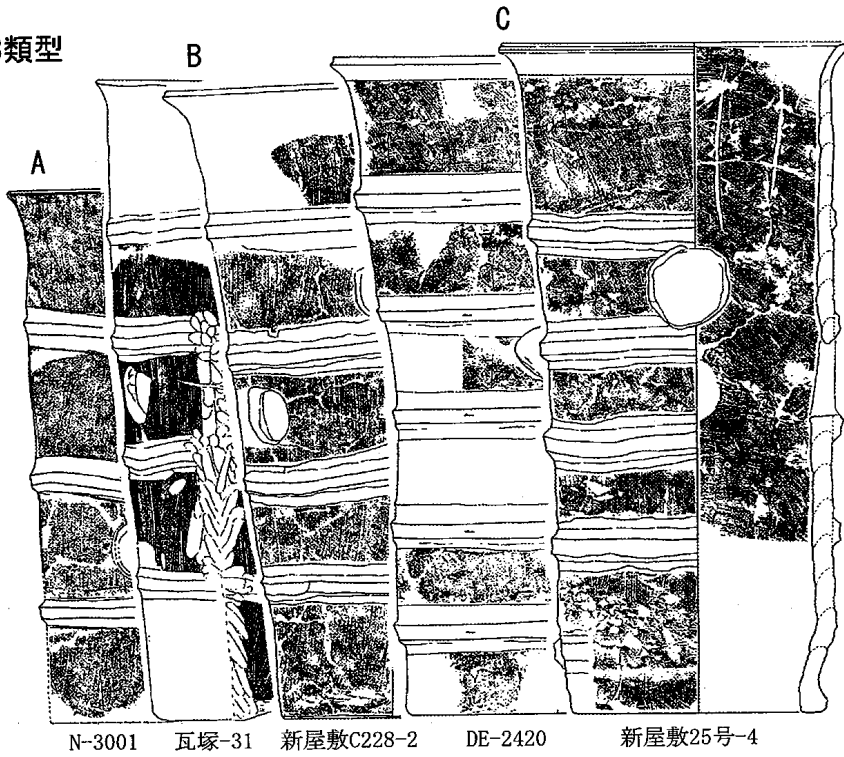
W4類型



W1類型

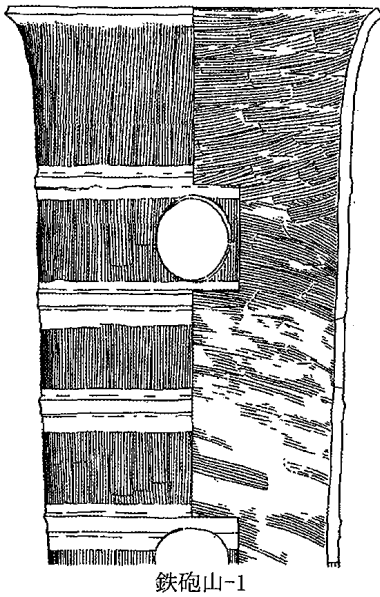


DE8類型

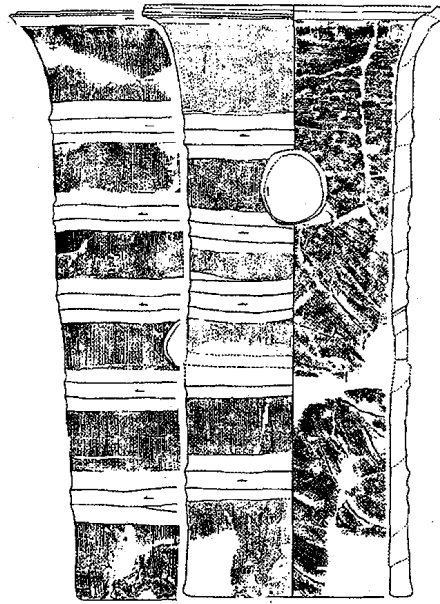


第2図 生出塚窯・埼玉古墳群における刷毛目共通類型の形態比較①

DE16類型



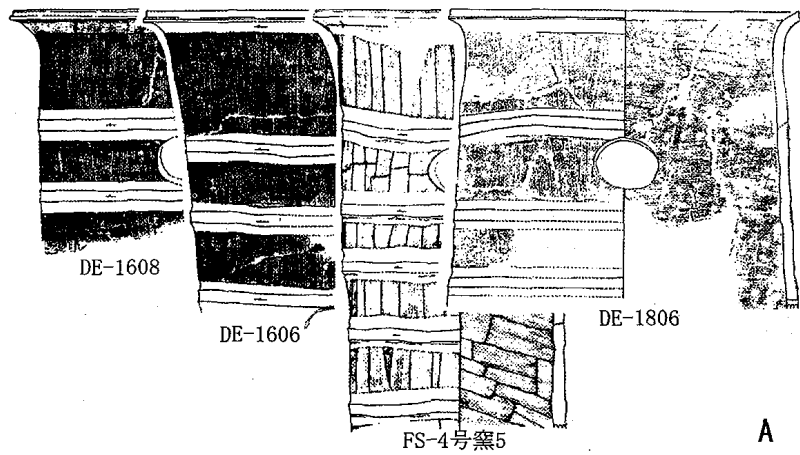
鉄砲山-1



DE-1802

DE-1804

DE5類型

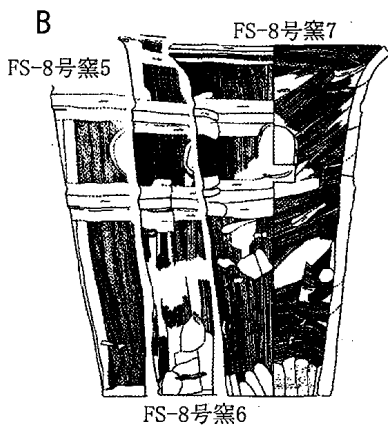


DE-1608

DE-1606

DE-1806

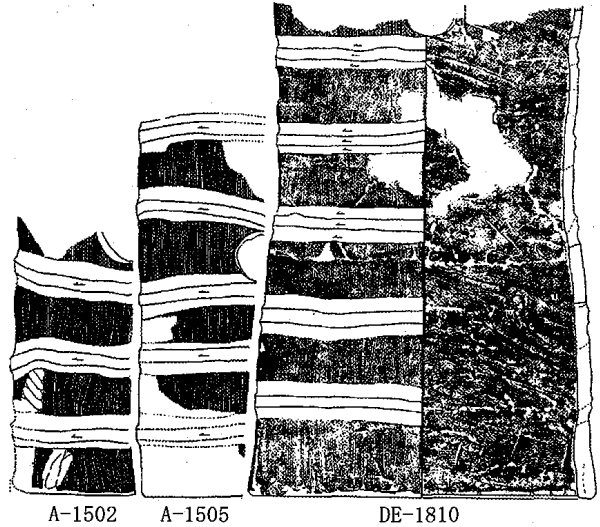
FS-4号窯5



FS-8号窯5

FS-8号窯7

FS-8号窯6



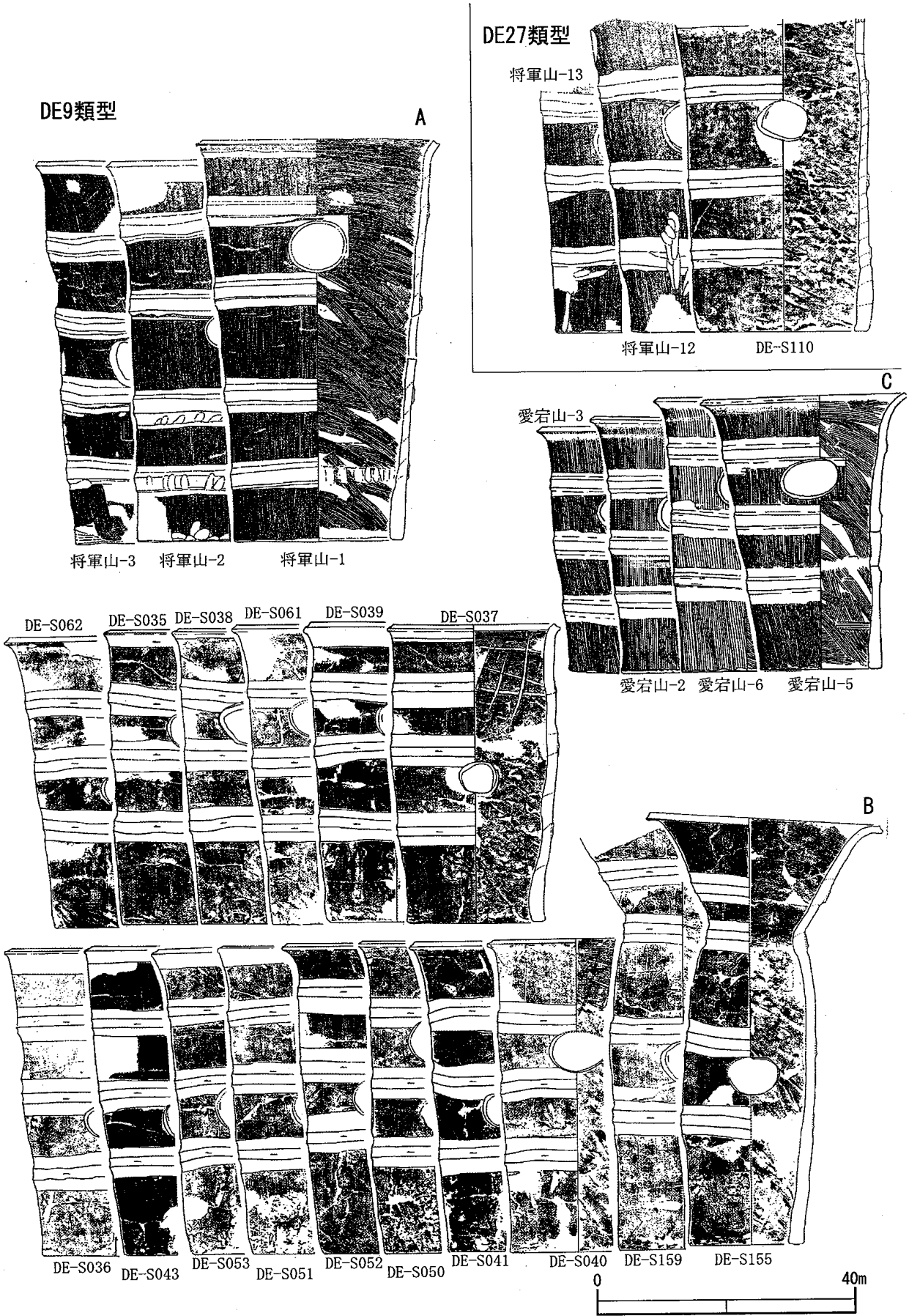
A-1502

A-1505

DE-1810

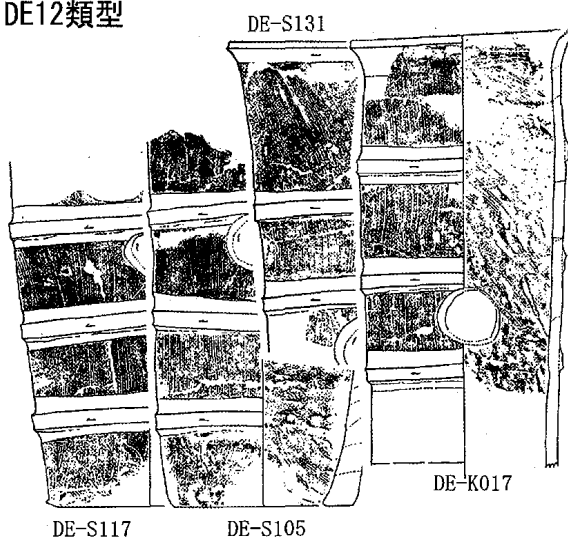


第2図 生出塚窯・埼玉古墳群における刷毛目共通類型の形態比較②

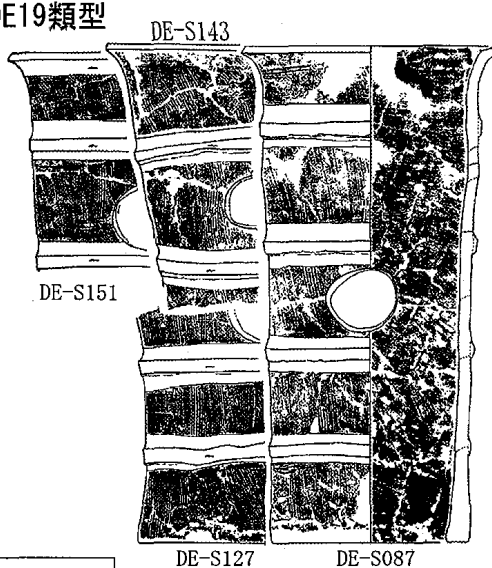


第2図 生出塚窯・埼玉古墳群における刷毛目共通類型の形態比較③

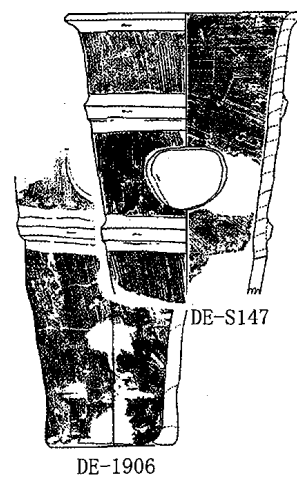
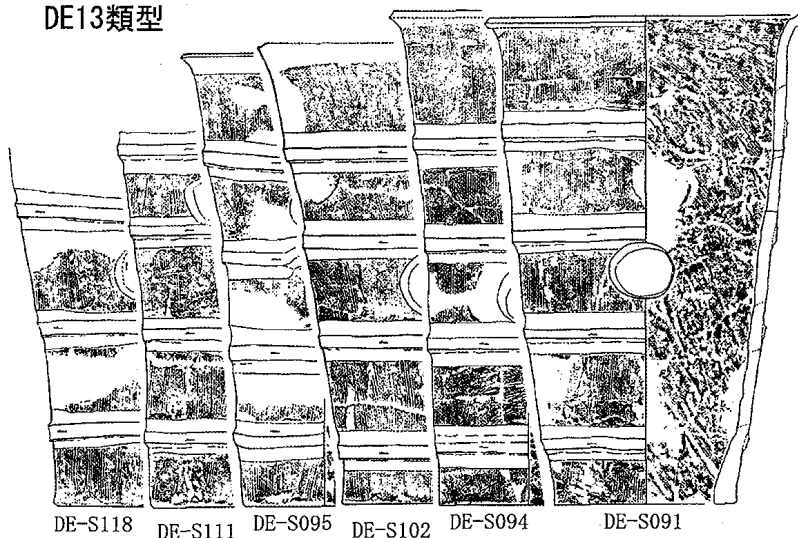
DE12類型



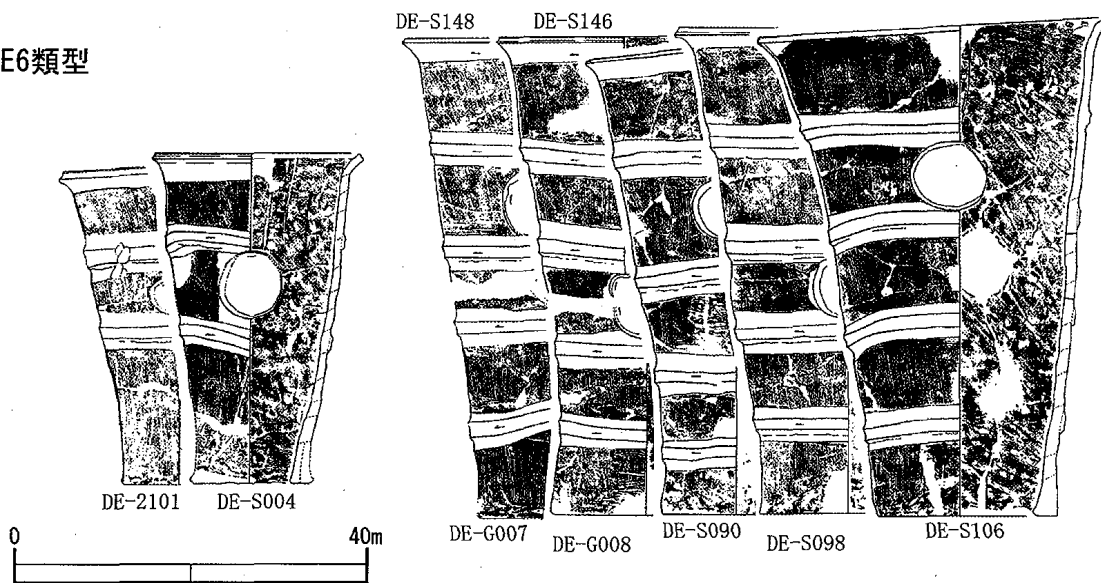
DE19類型



DE13類型



DE6類型



第2図 生出塚窯・埼玉古墳群における刷毛目共通類型の形態比較④

論点になる。この問題については、次節で詳述する。

次に、B類を見てみると、FS地点8号窯で出土した底部調整を伴う2条3段の埴輪が該当する。しかし、A類では内面調整の方向から右利きの工人が想定できるのに対して、B類は明らかに左利きの工人によって製作されている。現状では、同一工具が異なる工人に共有されているのか、あるいは「兄弟工具」が使用されているのかはわからないが、少なくとも近い時期に、A類・B類という異なる規格の埴輪が異なる「プロジェクト」によって製作されていたと推察される。

DE27類型(第2図③)

DE27類の刷毛目は、將軍山古墳の12・13の個体に確認できる。第2図③右上にあるように、DE地点S110の個体と比べると、全く同じプロポーションを呈し、低い2稜突帯、内面の密なナナメハケなどの特徴が共通する。同工品の可能性が高いといえる。

DE9類型(第2図③)

DE9類の刷毛目は、將軍山古墳・愛宕山古墳に確認できる。DE9類型は、以下の3類に分類できる。A類は將軍山古墳の4条5段、B類はDE地点21号窯あるいは22号窯で一括焼成された特徴的な線刻をもつ3条4段、C類はB類より若干小型で線刻を施さない愛宕山古墳の3条4段

である。まず、A類は將軍山の1・2・3の個体であるが、全く同じプロポーションで、突帯形状・内面調整から同工品と考えられる。なお、A類は前述したDE27類型と酷似する。次に、B類はDE地点の灰原に一括して廃棄されていた埴輪で、図にあるようにプロポーションは測ったように同一である。全ての個体で内面に「田」の字状の線刻が施され、低平で幅広な突帯、タッチの細かい内面調整など明らかに同工品である。C類は、愛宕山古墳出土品であるが、プロポーションがほぼ同一で、突帯形状・内面調整から同工品と考えられる。

以上、DE9類型はA・C類に細分できたが、それぞれは同工品の可能性が高い。今、3者を比較してみると、プロポーションは異なるものの、低平でナデ幅の広い突帯、タッチの細かい内面調整など技術的な特徴はよく似ている。特に、B類・C類については、線刻の有無、法量の点で差異はあるものの、同工品の可能性が高いと考える。B類もC類と同じく愛宕山古墳への供給を目的として製作されたものの、何らかの理由から一括廃棄された可能性が高いと考える。A類は、規格が異なることから簡単には比較できないが、同工品、あるいは近い技術の工人が製作したものである。いずれにしても將軍山と愛宕山の埴輪は、近い製作時期を想定できる。

DE 6 類型・DE 12 類型・DE 13 類型・DE 19 類型（第

2 図④）

DE 6・12・13・19 類の刷毛目は、いずれも奥の山古墳で確認している。各類型はいずれも諸特徴から同工品と考えられるが、DE 6・DE 19 類では2条3段の小型品も認められる。4条5段の円筒は、いずれも奥の山古墳への供給を目的に製作されたと考えられる。形態的には、DE 12 類型・DE 19 類型が寸胴気味、DE 6 類型・DE 13 類型が緩やかに開き、第1段が低く設定されるという特徴が認められる。2条3段と4条5段は諸特徴から同工品と考えられるが、2条3段の小型品はより小さい古墳への供給「プロジェクト」で生産されたものと考える事ができよう。

3. 生出塚埴輪窯における生産体制の諸相

第2節では、生出塚遺跡・埼玉古墳群出土の刷毛目が共通する埴輪を概観してきた。次には、その成果を踏まえた上で、埼玉古墳群に供給された生出塚窯産埴輪を通時的に位置づける事が課題となる。しかし、その前に、前述した各類型の出土状況を踏まえた上で、生出塚遺跡における生産体制の諸相をまとめておく。

出土状況（一括焼成品）からみた生産体制

生出塚遺跡においては、窯跡出土品のうち一括して焼成されたと考えられる出土状況を示す事例が幾つか存在する。ここでは、前節での分析を踏まえた上で、一括焼成品の位置づけに関して言及する。

まず、DE 9 類型のB類に関しては、山崎武によって一回の窯詰め単位である可能性が指摘されてきた（山崎一九八七・一九九四）。山崎は、生出塚遺跡での一回の窯詰め量を口径30cmの円筒で43本と試算している（山崎一九八五）。DE 地点捨場出土一括品（円筒最低数36本、朝顔最低数4（5本））は、山崎の試算とはほぼ合致する。また、円筒と朝顔形埴輪の比率が1対9である点にも注意しておきたい。前述したように、この一括焼成品は全て同工品と考えられるが、本事例の場合は、あらかじめ古墳での円筒・朝顔の樹立比率を考慮した上で窯詰めが行われている状況が復元できる。一方、W地点32・33号窯は、灰原を共有する2基の窯だが、確認できる4種類の刷毛目がすべて天祥寺裏古墳の埴輪と一致しており、2基は天祥寺裏古墳への主体的供給窯だと判明した。しかし、天祥寺裏古墳へ供給された大型円筒以外の2条3段の円筒埴輪も出土しており、複数「プロジェクト」において同一の窯が使用されている事がわかった。以上の状況から成果を何点かにまとめてみる。

①工人相互の不均等な役割分担が認められる。②特定の工人の作品が一括焼成される場合が認められる。③同工品は、一括焼成品など同一「プロジェクト」における変異幅は少ないものの、異なる「プロジェクト」においては変異幅が大きくなる。④同一の窯で異なる「プロジェクト」の生産が行われている。以上のような状況は、山倉1号墳の分析を主体として論じた小橋健二の「エース工人体制」の想定に適合的である。

双脚の男子人物埴輪

次には、A地点出土双脚人物に言及する。A地点出土の3体の双脚正装人物には、DE5類の刷毛目が認められ、同じくDE5類の刷毛目が認められる円筒埴輪は、鉄砲山古墳出土品とよく似ていることを指摘した。A地点出土人物が鉄砲山古墳に供給するために製作されたものかどうかは今後の資料の増加を待つかないが、いずれにしても鉄砲山古墳と非常に近い時期に100m級の前方後円墳への供給を目的として製作された可能性が高い。

ところで、6世紀後半～末の生出塚産双脚人物は他にも類例がある。第3図はそれらの形態を比較したものである。A地点15号窯から出土した3体、A地点西側の一次調査地点から出土した武人1体、市原市山倉1号墳から出土した

3体、そして横浜市北門1号墳から出土した1体を図示している。15号窯から出土した3体に関しては、法量、刷毛目、細部の特徴にいたるまで共通性が高く、山崎の指摘どおり、同工品の可能性が高い（山崎一九八七）。一次調査出土の武人埴輪も、脚部の格子状の線刻や彩色方法などA地点出土品と共通点が多いものの、鼻のつくり方、突帯の形状などに違いが認められる⁽³⁾。さらに、刷毛目もよく似ているものの、細部の木目の違いからA1類型として区別している。以上の点から考えて、A地点出土品とは別工人の可能性が高いと考えている。

次に山倉1号墳出土品については、以前からA地点15号窯出土品との共通性が指摘されてきた。しかし、山崎が両者の特徴の違いを列挙してまとめているように（山崎一九八七）、両者は細部において異なる部分が多い。すなわち、第3図を一見して明らかのように、窯・古墳それぞれの一括出土品に関してはその中でまとまりが認められるもの、15号窯と山倉出土品を比べると明確な差が存在する。これには、2つの可能性が考えられる。①1人の工人が、時間をおいて製作に関与した、②同一系譜の工人が作風を真似て製作した、の2つの可能性である。この問題は同工品研究において非常に重要な論点であり、安易に結論を下すことはできない。小橋が指摘し、本稿でも確認したように、

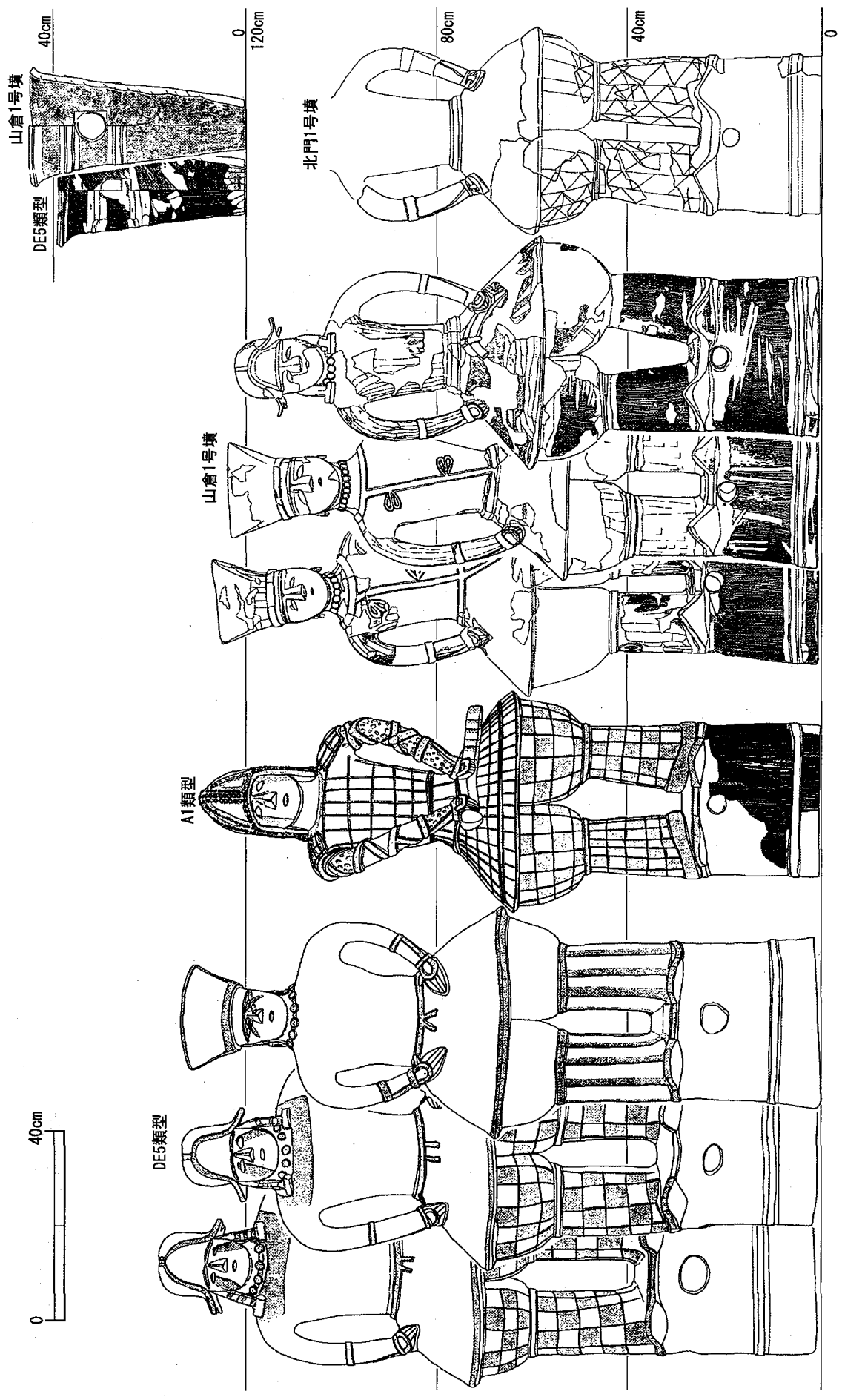
一人の工人においても「プロジェクト」毎の変異幅は異なるので、「一人の人間の生涯での変異幅」をどのように捉えるのかは、慎重に考える必要がある。しかし、窯の切りあいや古墳出土埴輪の年代観から考えれば、図に示した人物の「変化の方向性」はある程度把握する事ができる。一つめは、作りの粗雑化傾向である。生出土塚15号窯に比べて山倉1号出土品は全体的に線刻や彩色などの点において粗雑化が認められる。北門1号墳に関しては、さらに粗雑化している。二つめは、透孔と器台突帯の位置の変化である。15号窯出土品の透孔が大きく目立つ位置に穿孔され、突帯も高く設定されているのに対して、他事例は透孔が小さく、高い位置にあって目立たなくなり、突帯は非常に低い位置に貼付されている。三つめは、法量の縮小化の傾向である。この点は、焼き物の一般的な特徴として小橋が指摘する「模倣縮小」の可能性がある（小橋二〇〇四）。「模倣縮小」に関しては、九十九里の同一系統の人物埴輪群の変化でも同様の方向性を指摘した事がある（城倉二〇〇六a）。このように、第3図の人物群が同工品であるのか、それとも同系列の工人による模倣であるのかは今後更なる議論が必要なもの、一定の変化の方向性が看取できる点は注意しておきたい。いずれにしても、第3図に示した人物埴輪群が生出土塚窯においても、同系列の中で把握できる点は確か

であろう。

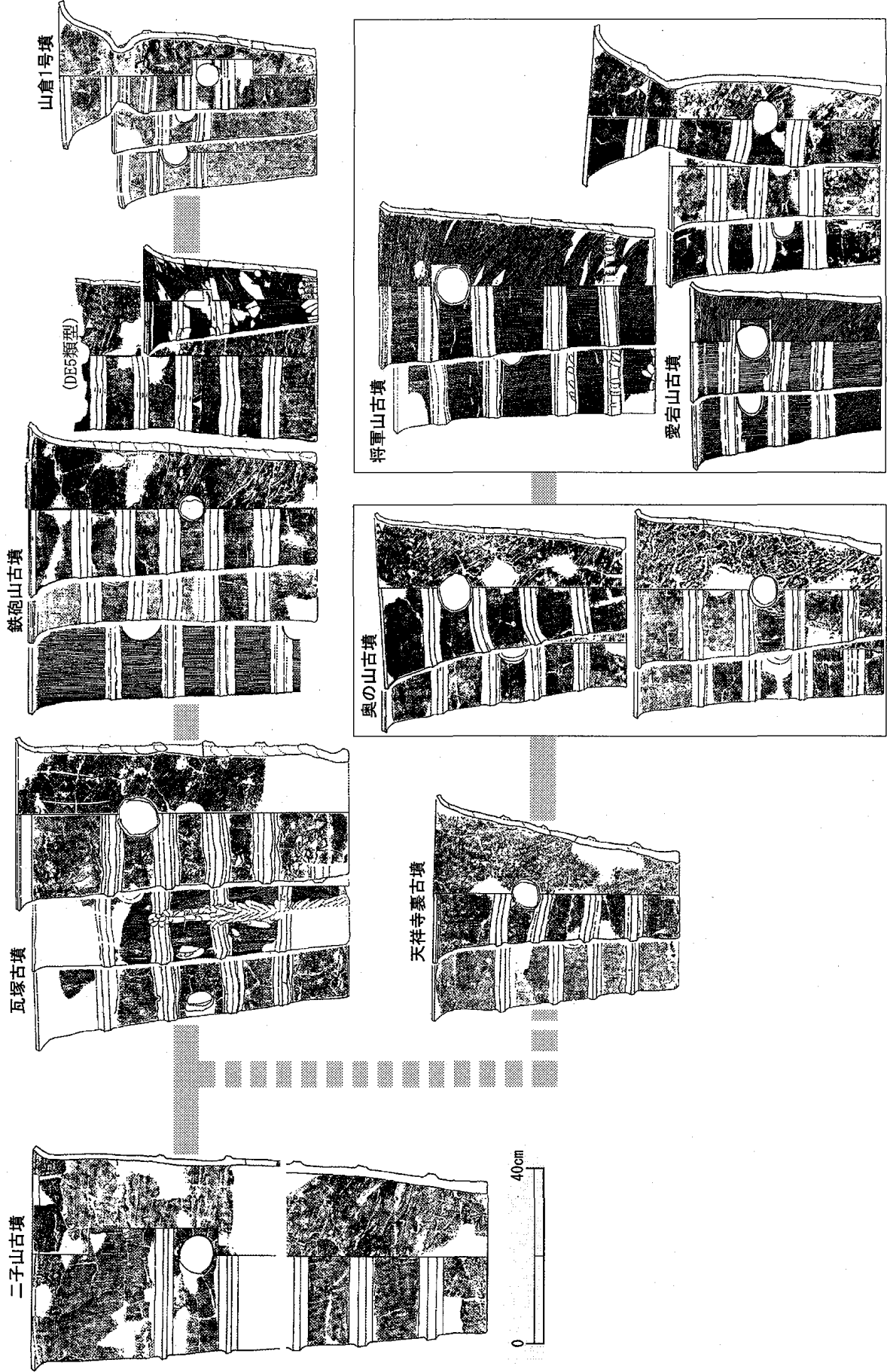
4. 生産遺跡からみた埼玉古墳群の埴輪とその変遷

生出土塚遺跡における刷毛目データベースの構築、および生出土塚遺跡における遺物相の検討によって、埼玉古墳群に供給された埴輪の様相が明らかになってきた。これら基礎的な作業の蓄積によって、従来は断片的な資料で論じられてきた埼玉古墳群の埴輪を生産遺跡の側から見直す可能性が生まれたことになる。まだまだ蓄積すべき議論も多いが、今後の叩き台として、現在までの分析をもとに埼玉古墳群に供給された生出土塚産埴輪の変遷過程を考究する。

まず、研究史における埼玉古墳群の編年観について言及しておく。埼玉古墳群の編年については、坂本和俊、岡本健一の研究が引用される事が多い。坂本は、古墳立地、埴輪、土器の様相から、稻荷山↓二子山↓天祥寺裏↓丸墓山↓愛宕山↓瓦塚↓鉄砲山↓奥の山↓將軍山↓中の山の編年観を示した（坂本一九九六）。一方、岡本は墳丘規格、埴輪の突帯扁平率の検討を踏まえた上で、出土土器から稻荷山↓二子山↓瓦塚↓鉄砲山↓將軍山↓中の山の編年観を示した（岡本一九九七）。特に、相似墳の検討、および埴輪



第3図 生出塚遺跡（DE5類型・A1類型）と山倉1号墳・北門1号墳出土土双脚人物埴輪の形態比較



第4図 埼玉古墳群に供給された生出土塚窯産埴輪の二系列

の系統別の突帯扁平率、土器から編年を行った岡本の分析精度は高く、大型墳のおよその編年は首肯できるものである。問題は天祥寺裏古墳、愛宕山古墳、奥の山古墳など、セカンダリークラスの規模を持つ古墳出土埴輪の位置づけである。以下、生出塚での様相を中心として議論を進める。生出塚遺跡における3条4段以上の埴輪を分析すると、大型品（5条6段以上）と中型品（3条4段・4条5段）では、形態・技術の点において差異が認められ、それぞれの系列においては比較的順調に変遷を追う事ができる。なお、2条3段の小型品に関しては、各系列に共伴する同一刷毛目の個体が見出される。今、その二系列の変遷過程を示したのが、第4図である。

まず、大型品の系列では、二子山古墳と瓦塚古墳の共通性が注目される。瓦塚古墳は、最上段が長く各段を均等に割り付ける形態で、突帯は二稜を明瞭に作出し比較的突出度が高い。この形態は、二子山古墳A1類とされる埴輪の特徴に類似する。また、瓦塚古墳出土品と同一刷毛目が認められる新屋敷25号墳出土品などでは、5条6段の個体のプロポーションが寸胴であることに注意しておきたい。続く鉄砲山古墳出土品は、突帯が瓦塚古墳よりもかなり低平化するものの、5条6段で寸胴なプロポーションに口縁部のみ急激に開くなど新屋敷25号墳出土品とよく似ており、

その変遷過程が追える。この鉄砲山古墳出土品に関しては、DE5類型の一群と酷似し、DE5類の刷毛目をもつA地点出土人物が山倉1号墳の人物埴輪と同系列である点は前述したとおりである。以上、埼玉古墳群の大型品は、二子山古墳↓瓦塚古墳↓鉄砲山古墳と順調な変遷を追う事ができ、山倉1号墳の埴輪も、この大型品の系列上に位置する事がわかる。

次に、中型品の系列で最も古く位置づけられるのが天祥寺裏古墳出土品である。天祥寺裏古墳出土品は、生出塚遺跡では現状で最も古く位置づけられるW地点32・33号窯で焼成されている。天祥寺裏古墳出土品は、口縁部に向かって大きく開いていく形状で、突帯の突出度が高い。この天祥寺裏古墳の埴輪とよく似ているのは、奥の山古墳出土品と刷毛目が一致するDE6・12・13・19類型で、特に第4図に図示したDE6・13類型はプロポーションがよく似ている事がわかる。突帯の突出度も比較的高く、角度のきつい内面調整なども天祥寺裏古墳と共通する。なお、奥の山古墳に刷毛目が共通する類型の中には、第1段が低い類型（DE6・13類型）も認められるが、いずれも特定類型内で認められることから、特定工人の特徴と考える事ができる。次に、将軍山古墳に供給されたDE9類型のA類は、奥の山古墳と刷毛目が一致する一群よりも若干プロポーション

ンが寸胴化するものの、緩やかに開く形状、段間を埋める大きな透孔などの特徴が共通する。そして、DE9類の刷毛目は、愛宕山古墳や生出塚DE地点一括出土品とも一致していた。將軍山古墳と愛宕山古墳出土品は、前者が4条、後者が3条と段構成が異なるものの、低平でナデ幅の広い突帯、大きな透孔、寸胴気味のプロポーションなどよく似ている。以上、埼玉古墳群の中型品は、天祥寺裏古墳↓奥の山古墳↓將軍山古墳・愛宕山古墳と変遷を追える事がわかる。

ここまで生出塚遺跡における遺物相の検討から、埼玉古墳群に供給された埴輪には大型品と中型品の二系列が存在し、それぞれの系列内で変遷が追える事実を指摘した。この二系列の存在は何を意味するのだろうか。山崎が指摘してきたように、生出塚産の埴輪を全体としてみれば、胎土や色調、形態、技術の点で共通性を見出せる(山崎二〇〇四b)。ところが、細部の形態・技術的特徴を見た場合、大型品と中型品ではそれぞれ異なる変遷を辿っていることがわかった。両者の違いを、単に大型品と中型品の規格の違いに起因する差異と考えることもできるが、その場合、両者に共通する刷毛目や同工品が見出せないことは不自然である。このことから、生出塚の生産集団では大型品を作るグループと中型品を作るグループという緩やかな二つの

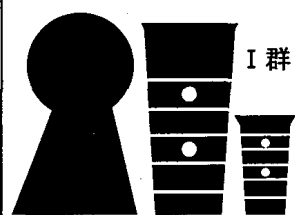
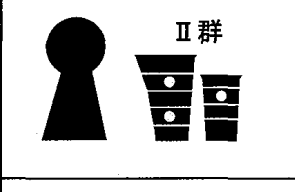

系列が存在していたと考える。そして、それぞれの系列のグループが小型品の製作「プロジェクト」も行っていたようである。このように埼玉古墳群に供給された生出塚産の埴輪という一つの系統の中で、二つの緩やかな系列を見出すことによって、各系列における変遷を明らかにした。両系列相互の相対的時間軸の整理は今後の課題であるが、少なくとも主に大型墳に供給された5条以上の大型品と中型墳に供給された3・4条の中型品の製作に緩やかなグループ差が存在した事実を指摘した点は重要といえる。

5. 北武蔵の埴輪生産と地域社会

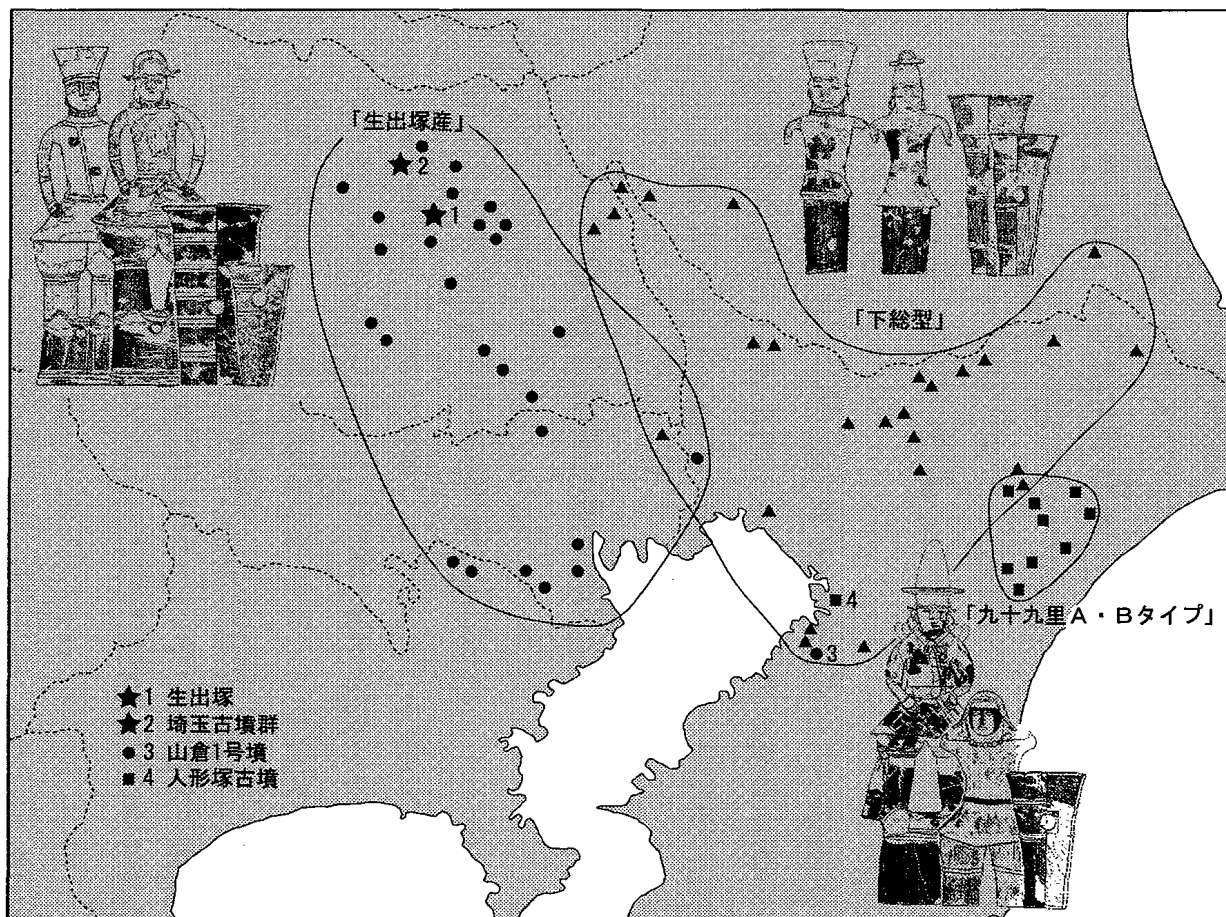
本稿では、埼玉古墳群に供給された生出塚産埴輪の分析成果を示した。最後に、それらの成果を踏まえた上で、当該地域の埴輪生産の具体像を地域社会という枠組みの中で考えてみたい。

まず、埼玉古墳群に供給された生出塚産埴輪には、大型品(I群)と中型品(II群)の二つの系列が存在することを指摘したが、第5図に示したように、I群とII群が樹立された古墳には明確な階層差が存在する。生出塚における緩やかな二つの系列の存在は、生出塚で組織された集団が場当たりに生産に従事していたのではなく、「大型墳へ

(I～IV期は山崎武の生出塚編年)

	I 期	II 期	III～IV期
 <p>I 群</p>	二子山 138m	(瓦塚 74m)	鉄砲山 109m
 <p>II 群</p>		天祥寺裏	將軍山 90m 奥の山 70m 愛宕山 53m ひさご塚 41m 多摩川台1号 39m
	(新屋敷60号 40m) 天王山 27m 埼玉2～4号	埼玉5号 26m 武良内1号 20m	山倉1号 45m 白山2号 40m 小沼耕地 39m 南大塚4号 36m 中井1号 30m 武良内2号 30m 柏崎26号 30m 袋台1号 22m 側ヶ谷戸11号 22m 赤羽台4号 20m 南原1号 16m 白幡本宿2号 11m

第5図 生出塚窯産埴輪が供給された古墳の規模



第6図 6世紀の関東における埴輪の地域性

の供給プロジェクト」、「中型墳への供給プロジェクト」、「小型墳への供給プロジェクト」という「プロジェクト」に応じて計画的に組織編成されていたことを示している。特に埼玉の大型墳へ供給する大型品の製作は、生出塚窯の集団においても特別な「プロジェクト」だったと考えられる。この大型品の製作グループが関与した山倉1号墳へ供給する埴輪の製作は、やはり特別な「プロジェクト」だったと推察される。埴輪や石材などの密接な関係から、特別な遠距離供給と考えられてきた山倉1号墳の事例も、以上のような生産地レベルでの分析から初めてその正確な位置づけが可能になる。このような状況からすれば、同じ2条3段の円筒埴輪が供給された古墳においても、単純化できない階層差が存在している可能性がある。今後、2条3段の分析を進め、同じ2条3段の円筒埴輪でも、I群とII群どちらの系列に属するのかを検討することで、より深いレベルで階層差の議論が可能になると考える。

このように生出塚窯における生産集団は、埼玉古墳群を造営した「首長層」を頂点とする階層秩序の中で、掌握・管理される集団だったと考える。だとすれば、生出塚窯産埴輪の分布集中域は、等質な階層秩序に組み込まれた「地域社会」を形成していた可能性が高い。この点については、今後、様々な遺物遺構の分析から総体的に考究する必要がある。

あるものの、埴輪の分析はその第一歩といえる。

以上のように、生出塚窯における埴輪生産の様相を、北武蔵を中心とする「地域社会」の中で捉えなおしたわけだが、6世紀の関東では、生出塚窯産埴輪と同じく「系統」が認識できる資料が多い。第6図は、6世紀の関東における各系統の分布を示したものである。ここで示した三者は互いに部分的に重複しながらも、独立した分布域を形成することに特徴がある。しかし、「下総型」「九十九里A・Bタイプ」の分析から導き出される生産体制は、本稿で言及した生出塚埴輪窯における状況とは様相が大きく異なるようである（城倉二〇〇六a bなど）。後期の埴輪生産は、各地域社会の状況に応じて多様に展開していったことにこそ、その意義があると考えている。各系統の「狭間」地域における「共存関係」あるいは「折衷形」の分析を通して、相対的な時間軸を整理するとともに（城倉二〇〇六b、二〇〇七c）、各地域社会の中で埴輪生産を捉えなおしていく作業が必要といえる。この点に関しては、稿を改めて論じたい。

おわりに

本稿では、埼玉古墳群に供給された埴輪のうち、特に生

出塚窯産埴輪に集中して分析を加えた。埼玉古墳群と生出塚遺跡で共通する刷毛目を確認した個体の分析を通して、大型品（5条以上）と中型品（3条・4条）という二つの緩やかな系列を抽出し、それぞれの変遷を示した。そして、系列を超えた同工品の存在、あるいは工具の共通性が確認できないことから、両系列を製作する二つの緩やかなグループの存在を考えた。特に、大型品の製作プロジェクトの重要性を指摘し、特別な遠距離供給が指摘される山倉1号墳も大型品の製作グループが関わった点を明らかにした。さらに、生出塚窯における生産集団を、埼玉古墳群の被葬者である「首長層」に管理・掌握される集団だと考え、「プロジェクト」の規模に応じてきわめて計画的に組織編制されるような生産体制であった点を指摘した。以上のように、北武蔵を中心とした地域社会の中で、生出塚窯における埴輪生産の様相を捉えなおした。

今回は、埴輪の分析成果から地域社会のあり方の一端を示したわけだが、次にはそのほかの遺物遺構の分析を行い多角的に地域社会のあり方を考究する必要がある。また、埴輪生産も古墳時代後期の関東という枠組みの中で各地域社会の動向とともに描き出す必要がある。これらの点については、総合的にまとめた論考によって責を果たしたいと思っている。

謝辞

本稿は、二〇〇六年度、早稲田大学に提出した博士学位論文の第四章の一部を骨子とし、その後の分析成果を踏まえて書き改めたものである。審査をしていただいた岡内三眞教授・菊池徹夫教授・杉山晋作教授に感謝申し上げたい。また、本稿執筆の機会をいただいた寺崎秀一郎准教授に感謝申し上げたい。さらに、本稿の執筆に際しては、生出塚遺跡の研究を長年にわたる蓄積してこられた山崎武氏に丁寧なご指導・ご教示を頂いた。心より感謝を申し上げます。また、資料調査に際しては以下の方々にご高配を賜った。末筆ながら、ご芳名を記して感謝申し上げます。

岩瀬讓・江原昌俊・大谷徹・太田博之・大屋道則・大久根茂・杉崎茂樹・田中正夫・中島洋一・山崎武・若松良一

（五十音順、敬称略）

註

① 埼玉古墳群の各古墳出土埴輪を詳細に観察すると、胎土・形態・技術から生産地が異なる複数系統を認識する事ができる。中でも、砂粒が少ない均質な胎土で赤色に発色する生出塚窯産埴輪は比較的認識が容易で、実際に生産地との刷毛目の一致を確認できる。将来的には、これら他系統の埴輪相互の関係も追求しなければならぬが、現在の資料状況からすれば、まずは生出塚系統の埴輪の通時的分析が急務である。

- (2) 円筒埴輪の条数が古墳の墳丘規模と相関する事実は早くから指摘されているが(増田一九八一)、5条6段以上の埴輪が供給される古墳は、埼玉古墳群においても稲荷山古墳・二子山古墳・鉄砲山古墳と一〇〇m以上の前方後円墳に限られる。埴輪の型式学的特徴からすれば、稲荷山古墳・二子山古墳にDE5類型が供給された可能性は考えにくく、鉄砲山に供給された可能性が考えられる。また、当該時期で埼玉古墳群以外では、真名板高山古墳(塚田・中島一九七七)、栢間天王山塚古墳(塩野一九七七・若松一九八二)が候補として挙げられる。
- (3) この点については、山崎武氏にご教示いただいた。

引用・参考文献

- 糸川 清 一九九六『一般国道464県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財センター
- 岡本健一 一九九七「確認調査のまとめ」『將軍山古墳』埼玉県教育委員会
- 金子直行・大谷 徹 一九九六『新屋敷遺跡C区』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 小橋健司 二〇〇四「山倉1号墳出土埴輪について」『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター
- 小橋健司 二〇〇五「山倉1号墳出土埴輪から見た生出塚遺跡」『埴輪研究会誌』第九号
- 小久保 徹・中島 宏・杉崎茂樹 一九八五『愛宕山古墳』埼玉県教育委員会

- 駒宮史朗・谷井 彪・若松良一 一九八九『奥の山古墳・瓦塚古墳・中の山古墳』埼玉県教育委員会
- 斉藤国夫・中島洋一 一九九四『埼玉古墳群発掘調査報告書』行田市文化財調査報告書三一
- 坂本和俊 一九九六「埼玉古墳群と无耶志国造」『群馬考古学手帳』第六号
- 塩野 博 一九七七「天王山塚古墳について」『埼玉考古』第一六号
- 塩野 博 二〇〇四『埼玉の古墳』さきたま出版会
- 芝山はにわ博物館 一九七五『下総小川台古墳群』
- 城倉正祥 二〇〇五「埴輪生産の多様性」『古代文化』第五七卷第一〇号
- 城倉正祥 二〇〇六a「人形塚古墳出土埴輪の分析」『千葉東南部ニュータウン35』千葉県教育振興財団
- 城倉正祥 二〇〇六b「埴輪の系統」『埴輪研究会誌』第一〇号
- 城倉正祥 二〇〇七a「埴輪製作に使用された刷毛目工具」『埴輪研究会誌』第一一号
- 城倉正祥 二〇〇七b「生出塚埴輪窯の基礎的研究」『埴輪研究会誌』第一一号
- 城倉正祥 二〇〇七c「千葉県流山市東深井9号墳出土埴輪」『埴輪研究会誌』第一一号
- 杉崎茂樹・小久保 徹 一九八五『鉄砲山古墳』埼玉県教育委員会
- 杉崎茂樹 一九八七『二子山古墳』埼玉県教育委員会

高崎光司 一九九二『新屋敷B区』埼玉県埋蔵文化財調査事業
団

田中正夫 一九九四『新屋敷遺跡A区』埼玉県埋蔵文化財調査
事業団

塚田良道・中島洋一 一九九七「真名板高山古墳の再検討」
『行田市郷土博物館研究報告』第四集 行田市郷土博物館

盤古堂考古資料展示室 二〇〇七『北門古墳群I』株式会社盤
古堂

昼間孝志・大谷 徹 一九九八『新屋敷遺跡D区』埼玉県埋蔵
文化財調査事業団

福田 聖 一九九八『末野遺跡I』埼玉県埋蔵文化財調査事業
団

増田逸朗 一九八一「埼玉政権と埴輪」『埼玉の考古学』新人
物往来社

山崎 武 一九八一『生出塚遺跡』鴻巣市遺跡調査会

山崎 武 一九八五「埼玉県における埴輪窯跡について」『埴
輪の変遷』群馬県考古学談話会

山崎 武 一九八七『鴻巣市遺跡群II (A地点)』鴻巣市教育
委員会

山崎 武 一九八七・一九九四『鴻巣市遺跡群III (D・E地点)』
鴻巣市教育委員会

山崎 武 二〇〇一『鴻巣市遺跡群IX (J地点)』鴻巣市教育
委員会

山崎 武 二〇〇二『鴻巣市遺跡群X (M地点)』鴻巣市教育
委員会

山崎 武 二〇〇四a『鴻巣市遺跡群① (N地点)』鴻巣市教
育委員会

山崎 武 二〇〇四b「生出塚埴輪窯の生産と供給について」
『市原市山倉古墳群』市原市文化財センター

山崎 武 二〇〇六『鴻巣市遺跡群② (W地点)』鴻巣市教育
委員会

若狭 徹 二〇〇二「古墳時代の地域経営」『考古学研究』第
四九卷第二号

若狭 徹 二〇〇四『古墳時代の地域社会復元—三ツ寺1遺跡』
新泉社

若狭 徹 二〇〇六「古墳時代における地域首長の政治領域」
『考古学雑誌』第九〇巻第二号

若松良一 一九八二「菖蒲天王山塚古墳の造営時期と被葬者の
性格について」『土曜考古』第六号

若松良一 二〇〇七「稲荷山古墳の埴輪と提起される諸問題」
『武蔵埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

図版出典一覧

第1図 (山崎二〇〇六)(坂本一九九八)の図面を改変して
作成。

第2図 埼玉古墳群・新屋敷古墳群・生出塚遺跡の各報告書の
実測図を改変して作成。

第3図 (山崎一九八一・一九八七)(小橋二〇〇四)(盤古堂
考古資料展示室二〇〇七)を改変して作成。

第4図 埼玉古墳群・新屋敷古墳群・生出塚遺跡の各報告書の

実測図を改変して作成。

第5図 (山崎二〇〇四b) のデータを改変して作成。

第6図 (山崎二〇〇四b) (城倉二〇〇六a) (糸川一九九六)
(芝山はにわ博物館一九七五) を改変して作成。